

第1回輪島塗の若手人材の養成施設の整備等に関する基本構想策定委員会
議事概要

- 1 日 時 令和7年4月10日（木） 13：30～15：00
- 2 場 所 輪島漆芸美術館 講義室
- 3 出席委員 出席者名簿参照
- 4 議事概要

（1）説明事項

事務局から資料に基づき説明

（伝統的工芸品産業の現状やプロジェクトの目的・方向性、養成施設の整備や運営主体等）

（2）意見交換

- 輪島塗に従事する人材は不足し、高齢化が進んでいる中で、さらに震災の影響で若手が輪島に残らない状況となり、技術継承が課題となっている。このため、若手の作り手の育成が急務。
- 若者が輪島塗に従事するためには、卒業後の経済的な不安を解消する仕組みが必要。
- 輪島塗を持続可能性な産業として復興させるためには、若手の参入を促進する仕組みづくりや国内外のネットワークを活用した販路開拓の取り組みも重要。
- 輪島が漆の聖地となることで、文化観光の有力なコンテンツとなり、地域活性化やインバウンド促進に大きく寄与する。
- 輪島塗の魅力を地元の人々に広く伝えることで、若い世代にその価値を理解してもらい、将来の作り手となる人材を育てる基盤を築くことも重要。
- 輪島塗のサプライチェーンが震災により十分に稼働していない状況。注文を頂いているが納期に間に合わないことが往々に発生。

- レベルの高い輪島塗を国内外に発信するには技術力が重要であり、また、今ある技術を若い世代にも繋いでいかなければならない。
- これまでのワーキンググループでは、輪島を漆芸の聖地にしようと議論してきた。そうすると輪島塗の定義からはみ出たものが出てくると思われる。これが輪島塗と言えるのか議論はあるが、基本を押さえつつ、技術やイノベーションにより世界に発信していくという考え方もある。
- 「輪島塗」は重要無形文化財として指定されており、文化財としての保存継承だけではなく活用という観点から、地域活性化・地方創生に向けてのスキルやマインドを持った人材を養成することは意義がある。
- 弟子を取ることが困難なのは他の分野でも同様な状況。個々で人材育成を行うのではなく養成施設を通じて人材養成をすることは有効であり、このプロジェクトで商品開発や海外展開などカリキュラムを組み込むことで、他の分野のモデルになる可能性もある。
- プロジェクトのテーマは創造的復興であり、輪島塗の復興を実現する重要な方向性として海外展開が挙げられる。日本国内で国際的な工芸の見本市を開催し、海外のバイヤーやコレクターなどを招き、日本で輪島塗を直接見てもらう機会を増やすことは、輪島塗の認知度向上や販路拡大に非常に効果的。
- 海外、特にヨーロッパで日本の工芸が認められる3つの要件として、①地域に根差した高度な技術、②普遍的な美、③デザイン性がある。世界では、銀行が美術品の海外展開を支援してきた例があり、日本でもメガバンクによる海外進出への支援も重要。
- ワーキンググループでは、創造的復興に向けて、輪島塗に関しては漆芸の聖地を目指そうという想いで検討を重ねてきた。これからは海外を見据えて取り組むことも重要だが、地場産業としても大事にしなければならない。若者が輪島の地で輪島塗に携わることにに関して、明るい未来を描けるよう、輪島や輪島塗、漆の素晴らしさを伝えていくことも重要な観点。地元から

輪島塗を志す若い世代がどんどん出てこなければ、一時的なものに終わりがねない。

- どうすれば若者が来てくれるかという観点も重要。ひとつは、養成施設の卒業生が将来に不安のないような経済的な処遇を確保できること、もうひとつは、モチベーションを高く持ち続けられること。経済的な処遇の確保という観点では、付加価値の高いモノづくりが重要。ベースとなる輪島塗の技術はこれからも承継する必要があるが、市場変化に対応し、新たな市場開拓を行うことも必要。それが出来れば、新たなプライシングも可能となり、付加価値を高めることが出来る。そのためにもマーケティングやプロモーション、原価管理等、アンテナを広く持った人材を育てていくことが非常に大事であり、新しい施設には期待。
- 輪島塗の産業は他産地と同じように右肩下がりで下がってきて、生活がでない中で、若手が将来の展望が描けず人材が不足してきた。せつかく施設を作って人材を育てても、生活が苦しいとなると本末転倒になる。輪島塗でしっかりと生活ができることが前提であるため、かねがね海外戦略が必要と感じていた。
- 漆は他のものとコラボしやすい。輪島塗を核として色んな展開が可能と思っている。海外展開がしっかりできれば、ここ輪島が、輪島塗を核とした世界的な工芸都市になり得ると考えている。この機会に本当の意味での日本を代表する漆芸を残していきたい。
- 養成施設でどういう人材を育てていくのか、当然2年ほどで養成期間を終えたら塗師屋に入っても3年は面倒みるから安心して頑張ってもらってくれと言えるような環境であれば、世界中からでも人を集めることはできるのではないかな。
- 輪島塗には、それ相応の人が集まる場に耐えうる作品や商品を提供できる力があるため、そうした場を設けて、発表することが重要。また、集中的にプッシュしていくことで、その魅力を広く伝えることができる。
- ヨーロッパの美術関係者からは、工芸に関しては世界を見渡してもフラン

スとイタリアと日本が世界で群を抜いて高いと言われた。人間国宝だけでなく伝統的工芸品全般が高く評価されているものの、その価値はヨーロッパでは十分に知られていない。このような状況を踏まえると、工芸にはまだ大きな潜在力がある。

- 最近、海外で起業をして戻ってくる方が多い。お金はアメリカの方で調達しやすいので、アメリカで企業するが、やはり研究開発は日本が最適だと言って、戻ってきてグローバル展開していることがある。このように、日本を拠点としながら、例えば養成施設で学ぶ若者を海外に武者修行に出すとか、もしくは海外のファイナンスを国内に持ち込むとか、いろいろなやり方がある。
- 持続的な養成施設を運営するために、民間から資金調達をして運用し学校を経営するという点では、神山まるごと高専が一つのモデルとなる。
- 輪島塗は地域に根付いた伝統を持つ工芸品であり、それをどうグローバルに育てていくかが重要。また、工芸と観光の結びつきを強化し、広く理解されていくと輪島塗そのものがディステーションの目的地になる。伝統の根付いた地域性を継承し、発展させることで、その延長線上に海外展開が見えてくるのではないか。
- 輪島塗の持つ唯一無二の伝統性を革新的な方法で発信することで、修学旅行や産業観光を通じて人々の交流を促進することにつながる。また、ヨーロッパでも人気を誇る漫画家・永井豪とのコラボレーションなど、新たな取り組みを進める一方で、輪島塗が本来守るべき根幹を確実に維持し、人材や資金を集める仕組みを構築することが重要。これらの取り組みは震災からの創造的復興の一環となる。塗師屋が人材育成をするという伝統はなかなか厳しい状況にある中で、養成機関による継続的な育成が輪島塗の未来を支える上で重要。